

ボランティア行動における動機づけ理論

小 栗 俊 之*

Abstract

The basic characteristics of volunteerism are as follows: it is voluntary, social, done without monetary reward, and creative. However, in Japan today the concept of volunteerism has not permeated into the consciousness of the population, and there is no clear definition of volunteerism. Research into volunteerism is new, and people now wish to explore the concept more deeply. The purpose of this study is to find the motivation theory of volunteerism using Freud's needs and adaptation theory and Maslow's growth hypothesis. As a result of this study, the psychological background for the motivation to volunteer includes peoples' need to contribute to society and instinct for self-realization. These two factors are founded, cause the action of volunteering.

Key words: volunteer, Maslow's growth hypothesis, Freud's needs and adaptation theory

はじめに

「風に立つライオン」という詩がある。これは、アフリカ・ケニアで、NGO (Non Governmental Organization) として、国際ボランティア活動を送った一人の医師の想いを綴ったものである。

The motivation theory of volunteer's action

*Toshiyuki Oguri

Correspondence Address: Faculty of Business Administration, Bunkyo Women's University, 1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-gun, Saitama 356-8533, Japan.

Accepted October 11, 2000.

Published December 20, 2000.

1990年から1993年までの3年間、青年海外協力隊員としてモルディブ共和国で生活を送った筆者にとっては、この心情を理解するのに難くない。この詩には、色々な想いやメッセージが含まれているように思う。

突然の手紙には驚いたけど嬉しかった
何より君が僕を怨んでいなかったということが
これから比処で過ごす僕の毎日の大切な
よりどころになります ありがとう ありがとう

ナイロビで迎える三度目の四月が来て今更
千鳥ヶ淵で昔君と見た夜桜が恋しくて
故郷ではなく東京の桜が恋しいということが
自分でもおかしい位です おかしい位です

三年の間あちらこちらを廻り
その感動を君と分けたいと思ったことが沢山ありました

ビクトリア湖の朝焼け 100万羽のフラミンゴが
一斉に翔び立つ時 暗くなる空や
キリマンジャロの白い雪 草原の象のシルエット
何より僕の患者たちの 瞳の美しさ

この偉大な自然の中で病と向かい合えば
神様について ヒトについて考えるものですね
やはり僕達の国は残念だけれど何か
大切な処で道を間違えたようですね

去年のクリスマスは国境近くの村で過ごしました
こんな処にもサンタクロースはやって来ます 去年は僕でした
闇の中ではじける彼等の祈りと激しいリズム
南十字星 満天の星 そして天の川

診療所に集まる人々は病気だけれど
少なくとも心は僕より健康なのですよ
僕はやはり来てよかったと思っています

辛くないと言えは嘘になるけど しあわせです

あなたや日本を捨てた訳ではなく
僕は「^{いま}現在」を生きることに思い上がりたくないのです

空を切り裂いて落下する滝のように
僕はよどみない生命を生きたい
キリマンジャロの白い雪 それを支える紺碧の空
僕は風に向かって立つライオンでありたい

くれぐれも皆さんによろしく伝えてください
最後になりましたが あなたの幸福を
心から遠くから いつも祈っています

おめでとう さようなら

作詞・作曲：さだまさし／編曲：渡辺俊幸

この詩の内容を捉えてみよう。この医師である彼は、付き合っている一人の女性がいた。彼女からの一通の手紙は、結婚をすることを決意したということを伝えているようである。しかし、その相手は彼ではなく別の人であった。愛は、国境を越えなかったということであろう。彼が日本に帰ってくるまで、彼女はその恋愛感情を保つことができなかったようである。彼もずっと離れていて、その時間も期間も長く、付き合っていたことに関して、引け目を感じていたようである。また逆に、彼がこの手紙を読んだとき、彼女も自分の幸せのために歩き始めた、という行動を想い、嬉しくをも思っている。

彼は、開発途上国に赴き、素晴らしい自然と大地と動物を見て感動するが、何より感動したのは、患者達の“瞳の美しさ”であった。電気はない、ガスもない、水道もない、衣食住すべてにおいて日本とはかけ離れた生活である。しかし、日本にはない「豊かさ」があることを彼は見つけたようである。詩の中で、「やはり僕達の国は残念だけれど何か、大切な処で道を間違えたようですね」とわれわれにメッセージを投げかけている。

戦後、日本の社会構造の変化は、めまぐるしいものがある。経済・情報・産業は高度化・技術化・国際化され、われわれは物質的な豊かさを手に入れた。しかし、「道を間違えた」と詠っているのは、何かを犠牲にして、大切なものを失ったと解釈することができる。それは“こころ”ではないだろうか。彼は、‘人間の存在’とはということをアフリカの自然の中で、考え始めていた。

「診療所に集まる患者達は病気だけれど、少なくとも心は僕より健康なのですよ」という歌詞は、まさしく「こころの豊かさ」を表しているように聞こえる。それは、何であろうか。物の豊かさを手に入れ、物質的な欲求から精神的な欲求の充実を望んできたわれわれは、具体的な行動に移すことができずにいた。近年、ボランティア活動が、盛んに行われるようになったのは、「こころの豊かさ」への適応行動ではないだろうか。ボランティア活動を行うことによって、人が人らしく生きること、また、失われた「こころ」を取り戻し、生きがいを求め、自己を実現する喜びを感じてきているのではないかと思われる。この詩は、人間が疎外されている状態をわれわれに気づかせ、人として足りない部分、侵された部分を再認識させてくれるものであるように聞こえる。

1995年（平成7年）に発生した阪神・淡路大震災には、被災地の救援と復興に全国から延べ140万人超（兵庫県把握）、1997年（平成9年）に発生した日本海タンカー重油流出事故災害には、全国から約26万人（全国社会福祉協議会把握）が参加した。また、最近では大雨や台風等で被害を受けた地域でも、復旧作業ボランティアが活動するケースが増えてきている。

このように、近年ボランティア活動に対する社会的な関心は益々高まりを見せ、上述した被災地での救援・支援ボランティアのみならず、社会福祉、国際交流、環境保全等といったあらゆる分野で活動が展開されている。

しかし、日本においてはボランティアに対する共通理念が浸透しておらず、明確な定義も存在していないのが現状である。また、ボランティアの研究も日が浅いためボランティアに関する探求が望まれている。

そこで、本稿ではボランティアの本質を捉えるために、第1章においてボランティアの語源を探り、第2章にて、ボランティアの概念を明らかにし、第3章では、内発的動機付け理論・フロイト（Freud, S.）によって提唱された精神分析学の中における欲求と適応の理論・マズロー（Maslow, A.H.）の階層構造説を取り上げ、比較検討しながらボランティア行動を駆り立てるその心理的な背景を論述してみたい。

1 「Volunteer」の語源

KENKYUSHA'S NEW ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY（第5版6刷・1982）によれば、「Volunteer」とは、c 1600=F-volontaire=L-voluntarius：⇒voluntary, -eerとなっており、-n. 1 志願者、有志者、篤志家、ボランティア、2 アメリカ義勇軍（Volunteers of America）の一員、3 米国 Tennessee 州の住民、4 志願兵、義勇兵、5 [法律] 無償不動産譲受人；無償労務提供者；義務なく他人の責務を払う者、6 [植物] 自生植物（volunteer plant）、-attrib. a dj. 1 有志の、志願の；自発的な；志願 [義勇] 兵の、2 [植物]（種をまかないのに）自生した、-vt. 自発的に申し出る；自ら進んで提供する [引き受ける、

伝える, 述べる] (offer freely) 2 <…しよう>自発的に申し出る, —vi. 1 進んで事に当たる [従事する]; (何かを) しようとし申し出る, 2 志願する, 志願 [義勇] 兵になる, 3 植物が自生すると訳されている⁽¹⁾。

ボランティア (Volunteer) の語源は, ラテン語の Volo (自らの意志を持って行動する・喜んで何かをする) という意味を持つ動詞から派生し, 同じくラテン語の Voluntarius (自発的に・喜んで) となり, Voluntas という女性名詞となり, フランス語の Voluntaire (喜び) に継承された。フランス革命時において, 革命軍が革命と祖国の防衛のために, 1792年にフランス各地から義勇軍を募った。“ラ・マルセイエーズ” は, 彼らによって歌われたが, その義勇軍を Volontarie と呼んだ。さらに, それに人を表す人名称の接尾語 —er をつけて “Volunteer” としたのが, アメリカのバリトン夫妻であり, 1896年に「The Volunteers of America」を結成し, 社会福祉協力活動を始めた。

わが国においては, 上述したように名詞として「志願兵 (者)」「篤志家」「有志者」などと訳されており, 動詞としては「自発的に申し出る」「自ら進んで提供する (引きうける・伝える・述べる)」など⁽²⁾と訳されている。

“志願” とは, ころごし願うこと・ある事をのぞみ願い出ること。

“篤志” とは, 親切なころごし, 慈善心, ある目的のための催し・運動に熱心なこと。

“有志” とは, ある事柄についての関心やそれに関係する意志を持っていること。

“義勇 (兵)” とは, loyalty and courage ; heroism (a volunteer army [corps])

忠誠・愛国心と勇氣・度胸; 英雄的資質・武勇・英雄的行為

“志願 (兵)” とは, desire ; aspiration ; volunteering (a volunteer army [corps])

このようにボランティアの語源を探てくると, ボランティアとは, ただ単に「人のために何かをしてあげる」といった, 「慈善」「奉仕」「援助」などの単純な解釈にとどまることができない様相を呈してくる。他に, 「自発」「自由」「勇氣」「正義」「忠誠」「英雄」「生きがい」「自己実現」「共感」など, ボランティアという言葉の背景には様々な思いが込められているようである。わが国には, 外来語として背景や思想を伴わず, 「ボランティア」という言葉が輸入されてきたため, 現在においても定義についての明確な定説は持ち得ていない。今後, 活動が活発化し拡大化して行く中で, 徐々にわが国独自の概念が確立されて行くのかもしれない。しかし, 現状を見てみると少しずつではあるが着実に「ボランティア」という言葉が一般化し, 市民権を得てきているということができると思われる。

2 ボランティアの概念

2-1 ボランティアの性格

ボランティアという言葉が最初に登場したのは, 1640年代のイギリスであったといわれている

る。しかし、このボランティアと呼ばれる用語がそれ以前になかったとしても、生命と暮らしを市民の立場から守り、皆で力を合わせて共に生きて行こう、より良い暮らしをして行こうという生き方・考え方は人間が社会生活を始めたときから存在していた思想に違いない。そして、その生き方・考え方はボランティアの思想に他ならないのである。わが国においては、ボランティアという言葉が、輸入されたものであるため歴史的背景が存在しない。そのため、ボランティア活動の定義についての明確な定説はないようである。したがって、現在ではボランティア活動の概念を考察する場合、ボランティアの性格や役割を用いて説明する機会が多い。その基本的性格として、「自発性」「主体性」「公共性」「利他性」「福祉性」「社会性」「連帯性」「継続性」「先駆性」「創造性」「開拓性」「無償性」「無給性」「非営利性」などが挙げられる。その中でも、以下に列挙する4つが代表的なものとなっている。

1) 自主性・主体性

自らの意思、内発的促し。他から強制されたり、義務としてではなく、自分の意思で行う活動である。

2) 社会性・連帯性

その時代の課題を見つめ、他者へ関わり、共感、連帯して生きること。また誰もが活き活きと豊かに暮らして行けるように、互いに支え合い、学び合う活動である。

3) 無償性・無給性

損か得かの経済原則を越えた非営利性。金銭的・物質的・社会的営利を目的とはせず、報酬を期待して行う活動ではない。その活動を行うことによって、お金では得られない出会いや発見、感動、喜びを得ることができる。

4) 創造性・先駆性

より質の高い生き方を絶えず求める。今、何が必要とされているのかを積極的に考えながら、より良い社会を自分達の手で創る活動である。

上記のような基本的性格を踏まえ、全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センター所長・和田敏明氏は、ボランティア活動を「他者が生活していく上での困難や、社会が存続して行く上での困難、またよりよい地域社会づくりへの必要性に対して、自分の心が動かされ共感し、これらの解決や改善そして実現のために、個人が持つ内発的な力を発揮する自由な意思に基づく主体的な活動」と概念を定めている。つまり、ボランティア活動の中で一番大切な行動理念は、自分自身の自由意思に基づくものであると考えることができる。ギリシャの哲人プラトンは、人間を自由人と奴隷の二類型に分類し、「自由人とは、自己の行動目的を自分自身の自由意思をもって決定していく人、奴隷とは、自己の行動を他者からの強制をもって決定されていく人」と定義している。ボランティアはまさにこの自由人であるということができよう。このボランティアの自発性は、自分の行動への強い自主性と共に、自己責任を前提としている。自己の能動的行動は、他人のための実践的活動であり、報酬や地位・名声などを求めるものではなく、全くの善意の連帯行動として、「与えるもの」である。したがって、そこ

には進んで苦勞に立ち向かう積極的な「勇氣」が存在しなければならない。「勇氣」はボランティア活動の本質に関わる成功の条件であると考えられる。⁽³⁾

1970年代からボランティア活動は促進され、国民への定着も急速に進んでいる状況ではあるが、活動の阻害要因が無いわけではない。それは、「自発性・主体性」「社会性・連帯性」「無償性・無給性」「創造性・先駆性」などの基本的性格を兼ね備えていなければ、それはボランティア活動とはいわないという閉塞的な考え方である。この考え方を払拭して行かなければ、今後、ボランティアの発展と活性化は難しいものになるのではないかと思われる。ボランティア活動は、「誰でも」「いつでも」「どこからでも」「どんなやり方でも」できる、心の様相を具現化したものである。少しの勇氣を持って、原則・原理にとらわれ過ぎることなく行動を起こすことが必要であると思われる。

ところで、日本では、ボランティア（活動）に代わる言葉として、時として「奉仕（活動）」という言葉が使われるが、ボランティアは、奉仕という言葉では包含し尽くせない部分であるということができる。それは奉仕の意味が、「奉（たてまつ）る」「仕（つか）える」と表現されているものであり、「奉公減私」または「お上に仕える」といった上下関係の意味合いを含んでいるからである。この意味において、自由意思というボランティアの本質とは、相反する意味があると捉えることができる。ボランティア活動は、他から強制される活動ではなく、ましてや上下関係を基本とするものでもない。それは、自由な市民という立場からの自由意志に基づくタテ・ヨコ共に対等な関係である。このように考えると、「ボランティア（活動）」と「奉仕（活動）」を同一視していた昭和30年代と比べると現代では、ボランティアという言葉が独自の意味を持ち始めているように思われる。また、全国社会福祉協議会では、「今までの Volunteer」と「これからの Volunteer」を図表1のように説明している。このように、ボランティアという言葉は時代の流れと共に変遷しているといえる。現代社会の様相を鑑み、われわれの社会的背景を分析し考察する中で、また新たな見解がなされるかもしれない。

2-2 活動分野と実態

ボランティアセンターが把握する、わが国の活動者個人及びグループ数は、1998（平成10）年4月現在の社会福祉協議会・全国ボランティア活動センター調査で、活動者数621万8,919人、団体数8万3,416団体となっている。活動者数については、5～10%程度の率となっている。

経済企画庁は、全国規模の市民活動団体調査（市民活動レポート）において、ボランティアを「継続的、自発的に社会活動を行う、営利を目的としない団体で、公益法人でないもの」と定義し、以下のような分類を行っている。

- 1) 社会福祉系：高齢者福祉，児童・母子福祉，障害者福祉，その他社会福祉
- 2) 教育・文化・スポーツ系：教育・生涯学習指導，学術研究の振興，スポーツ，青少年育成，芸術・文化の振興
- 3) 国際交流・協力関係：国際交流，国際協力

図表1 「Volunteer」意識の変化

今までのVolunteer	要素	これからのVolunteer
慈善, 救済	意味	Self-help, 自治, 自立
特別な場所で	場所	いつでもどこでも
少数の, 特別な, 豊かな人が	人	誰でも (健常者も障害者も)
恵まれた人~そうでない人へ	誰のために	お互いのために
一方通行	ベクトル	双方向
非寛容	気持ち	多様性の許容
選民意識	活動者意識	普通の人
自己犠牲, 耐える	精神状態	気軽に, 楽しく, 喜びを持って
教育的	形態	自己学習的
目的はひとつ	目的	目的は様々
受け手と担い手の関係のみ	人間関係	ネットワークの増大
活動者側の自由・勝手	責任	責任を持って
本人の気持ち優先	気持ちの位置	受けての視点
コミュニティとは無関係	範囲	コミュニティ活動
すべてが手弁当(無償性)	資金	経費はかかる(有償性)
素人の集まり	組織	NPO
陰徳	徳	社会的評価も否定しない(陽徳)
他人がすること	活動は誰が	するのは私

- 4) 地域社会系：まちづくり・村づくり, 犯罪の防止, 交通安全, 観光の振興, 災害の防止・災害時の救援
- 5) 環境保全系：自然環境保護, 公害防止, リサイクル
- 6) 保健医療系：健康づくり, 医療
- 7) その他：消費者問題, 人権, 女性, 市民活動支援, 平和の推進, その他

なお, 経済企画庁より把握された8万5,786団体(1996年9月現在)のうち9,826団体に対して行われた郵送調査の結果では, 主に活動している分野は, 社会福祉系が37%を占め, それ以下は, 地域社会系17%, 教育・文化・スポーツ系が17%, 環境保全系が10%, 保健医療系が5%, 国際交流系が5%となっている。

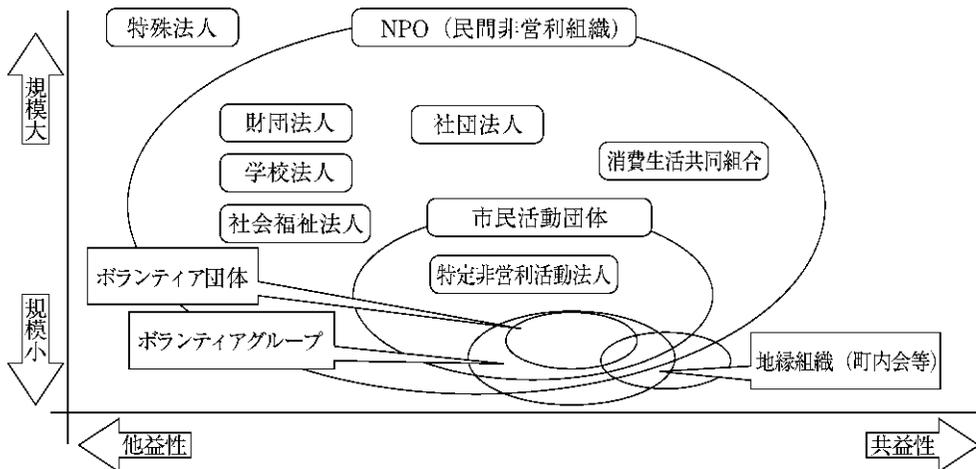
また, 経済企画庁が1998年6月に発表した「日本のNPOの経済規模」によれば, 民間非営利活動団体におけるボランティア活動の有償評価額(年間延べ活動時間数×賃金単価-有償部分)の総計は6,500億円と算出されている。

一般的に, ボランティア活動は報酬を求めず, 自発的な行為に基づいて自分の持っている能力等を他人や社会のために提供することという意味合いで捉えられているように思われるが,

その活動の種類や領域は多種多様であり、生産・販売のような経済的活動でもないことなどから、世の中でその存在は多くの人が認識してはいるが、これまで明確な定義付けはなされてこなかった。日本だけでなく、ボランティア活動が盛んに行われている欧米諸国でも厳密で統一的な定義付けはなされていない。このように、ボランティア活動の定義付けがなされていないのは、ボランティアに対する理念や概念を求める声が最近になって現れてきたこと、ボランティア研究が始まってまだ日が浅いことなどが考えられるが、統一的な定義の基に、ある行為をボランティアであるか否かを定めることの意義がどれほどあるか、ともいわれている（「ボランティアと取り巻く諸概念の構成」を図表2に示す）。

本稿ではあえて、前述したようにボランティア活動の基本的な性格を「自発性・主体性」「社会性・連帯性」「無償性・無給性」「創造性・先駆性」とし、分類についても経済企画庁の市民活動団体調査(市民活動レポート)を引用し、社会福祉系、教育・文化・スポーツ系、国際交流・協力系、地域社会系、環境保全系、保健医療系、その他とした。しかし、定義については、上述のように何をボランティア活動とするかを先に決定するよりも、むしろ、他人や社会に対して自分が何をしたいか、どのように関わりたいかという個人の自発的・主体的な意識に重きを置き、優先させた方が良いのではないかとと思われる。⁽⁴⁾

図表2 ボランティアを取り巻く諸概念の構成



出所：『imidas'99』，集英社，1999，572ページより作成。

3 ボランティア行動を駆り立てるもの—その心理的背景—

ここでは、人々は何故ボランティア活動に駆り立てられるのかという疑問に対し、動機付けの理論からそこに潜んでいる欲求の存在を把握し、その欲求はどのように沸き上がってくるも

のなのかを現代社会の背景から分析したい。また、欲求に対する適応行動の理論をフロイト (Freud, S.) の精神分析理論とマズロー (Maslow, A. H.) の階層構造説を比較しながら検討する。そして、人間の行動の源は欲求実現のために引き起こされることを踏まえ、自己実現欲求を満たす最良の適応行動が、ボランティア活動として現れる過程を論述して行くことにする。

3-1 動機付け理論と社会的背景

3-1-1 動機付け (motivation)

生活体、特に人間の行動の源泉は何であるか、という問題は以前から考察されてきたものであるが、19世紀末から20世紀初期にかけて功績を残したフロイト (Freud, S.) は、人間のすべての行動は性本能と攻撃本能から派生すると考察した。またその同時期、アメリカのマクドゥーガル (W. Mc-Dougall) は、本能を逃避・闘争・拒否・保育などの10種類に分類した。しかし、本能論は「人間が闘争するのは闘争本能があるからだ」といったように、単なる言葉の置き換えに過ぎないと批判され、その後使用されなくなった。生活体のより構造的な概念は、キャノン (W.B. Cannon, 1932) のホメオスタシスの考え方を反映し、生活体の適応に関する生理的側面を重視している。そこで使われる基本的概念が「動機付け」である。

動機付けは、生活体の行動を発現し、その行動を目標に方向付け、行動の終結に向かって保持・推進させる過程、あるいは機能を意味している。動機付けにはいくつかの側面が存在する。それは、生活体を行動に駆り立て、方向付ける内部環境—動因と要求(欲求)—である。これは、外部環境の変化に対応し生活体内部の環境を順応させようとするホメオスタシス的な考え方を反映したものである。一方、生活体外に存在し、動因によって引き起こされた行動を方向付ける対象や事象を誘因 (incentive) と呼んでいる。すなわち、動機付けは動因や誘因を含めた包括的な概念といえる。また、行動の結果として生活体の内部環境が変化し、順応状況に向かうことを、動因低減 (drive reduction) ⁽⁵⁾ といわれておりハル (C. L. Hull) などにより学習の成立条件として重要視されてきた。

3-1-2 要求(欲求) [need]・動因 [drive]・動機 [motive]

行動が発現するには、生活体側もしくは対象・事象側に何らかの要因が必要であるが、欲求を含めた要求・動因・動機はすべて、行動を駆り立てる生活体側の状況要素である。要求は、生命維持のための個体保存欲求(食欲、口渴、睡眠、排泄、呼吸、活動など)や種族保存欲求(性欲、母性本能など)などを含めた一次的要求 (primary need) と呼ばれるものと、自我的欲求(安全、愛情、自己承認など)、社会的欲求(自己顕示、集団帰属、独立など)を含む社会生活に関わる二次的要求 (secondary need) に分類される。欲求は、要求と同じく need の訳である。動因や動機も同じような意味合いがあるが、動因は生理的・生得的な一次的要求として、また動機は、例えば社会的動機のように後天派生的な二次的要求として、それぞれの状況に対応して用いられることが多い。⁽⁶⁾

3-1-3 身体の恒常性—内部環境とホメオスタシス—

外部環境は、地域差、季節差、日差などの影響を受けて、常に変動している。しかし、人体は皮膚や粘膜で覆われ外界と隔てられ、外界の影響を受けにくくなっている。そのうえ、内部にある組織や器官は多数の細胞によって構成されており、血液・リンパ・組織液などの体液に取り巻かれているが、人体はこれらの体液を常に一致に保つような機能を持っている。これを恒常性という。フランスの生理学者、ベルナール (C. Bernard) は、この生体内部の細胞や器官が生命活動を営む場を内部環境と呼んだ。

生体が外部環境の変化に適応し、生命を維持していくためには、この内部環境の物理的・化学的条件が適当な範囲内に保持されていなければならない。例えば、体温は普通36℃～37℃に保たれているが、これは発生する熱と放散される熱とがバランス良く均衡が保たれているからである。外気温が高かったり、体内の熱生産が大ききときには、発汗が起こると共に、皮膚血管が拡張して皮膚への血流を増加させ、蒸発・放射・伝導および対流によって、放熱を促し、また一方では、身体活動を減少させ、熱生産を抑制する。反対に、寒冷の条件下では、体内温度を保つために皮膚血管が収縮し、体表面の血流量を減少させる結果、熱の放散を防ぐと共に、意識的にからだを動かしたり、反射的に震えが発生し、熱の生産を促す。また、体内の水分は、体重の約60%～70%に保たれており、飲食物から摂取する水分と尿・汗・呼吸・糞便などによって排出される水分とによって調節されている。激しい嘔吐・下痢・発汗などのために、多量の水分が体内から失われると、血液水分が減少し血液は濃縮される。この結果、血液浸透圧が高まり、水分が組織から血液中に移動して、血流量を維持する。その他、血液中の血糖は、血液100ml中で、ほぼ80mg～120mgの水準に保たれている。血糖が正常範囲を超えると、膵臓からインシュリンが分泌され、ぶどう糖を肝臓でグリコーゲンに合成したり、組織で水と二酸化炭素に分解する働きが高まり、その結果、血糖量をさげる。これとは逆に、血糖量が正常範囲を下回るような時には、副腎皮質からアドレナリンが分泌され、肝臓のグリコーゲンを分解し、ぶどう糖に変換させ血液中に送りこむ。

このように、生体が内部環境の恒常性を維持しようとするしくみや過程を、アメリカの生理学者、キャノン (W.B. Cannon) は、ホメオスタシス (同一の状態)⁽⁷⁾と呼んだ。

3-1-4 内発的動機付け (intrinsic motivation)

従来の動機付け理論は、上述したホメオスタシスの原理に影響を受け、生活体の内的状態が不均衡状態を作り、不快な緊張が生じたときにそれを回復すべく行動を引き起こし、行動の終結に向かって維持・推進させる機能であると述べた。したがって、行動を喚起し方向付ける内的状態の要求 (欲求) 的・動因的・動機的要素は、食欲、口渴、睡眠、排泄、呼吸、活動、性欲、母性本能などの一次的なものと、自我的、社会的な二次的なものが考えられてきた。しかし、この考え方は、生活体を受動的な存在、つまり動因低減をもたらす外的報酬によってのみしか対処しないものと捉えられていた。これに対して、自分の興味や関心など内面から湧き出

た動機にしたがって行動している状態を内発的に動機付けられた状態と呼んでいる。内発的動機付けは、単に環境に左右される面だけでなく、自ら主体的に行動する面も併せ持っているものである。また、その行動のいかなる報酬にも依存しない動機付けであり、報酬はその行動がうまく遂行できたという満足感の中に、あるいは行動すること自体に備わっているとされている。内発的動機付けを構成する動機は、好奇心が主要なものであるが、その他に達成への欲求、社会的集団への貢献の欲求などが挙げられている。このように、内発的動機付け理論は、生活体⁽⁸⁾を好奇心が強く、積極的・能動的に外部環境に働きかける行動とみなすことと強調している。

ボランティア活動は、自由意志に基づく主体的な行動であることから、上記で論述した内発的動機付けによる行動であると考察することができる。では内面から湧き出た動機は何によってもたらされたのであろうか。また、達成への欲求や社会集団への貢献欲求などを駆り立てる源は何であるか、内発的動機付け構成要素を駆り立てる誘因は何であるかを、次項において現代社会の背景から考察することにする。

3-1-5 現代社会の背景と内発的動機付けの誘因

国民生活白書（1993年）の報告によると、戦後、人々の生活スタイルは、都市部への激しい人口移動と共に核家族化が進展し、多くの人々が雇用者として職分分離の生活体系を余儀なくされた。そこには、産業構造の転換という社会的要請があったと共に、地元を離れて新しい地で生活を営みたいとする新しい世代のニーズもあったかもしれない。勤労者としての生活を営むようになったわれわれは、入社してから帰社するまで職場に拘束されることになるが、高度経済成長期においては労働時間や出勤・帰宅までに要する通勤時間も長く、家庭や地域と過ごす時間は極めて減少した。そのため、生活の場や人との触れ合いの場は職場に限られるようになった。多くの勤労者は、同一の企業で勤労生活を送り、経済的基盤はもちろんのこと、生きがいの発見や交友関係に至るまで、殆どすべてを企業内で見出すようになった。その結果、個人の生活は企業での就労を中心に律せられるようになり、個人と家庭、個人と地域社会などの関係は、相対的に疎遠化の方向を辿った。一方、家庭においては、核家族化や出生率の低下によって世帯規模が縮小し、日常における家族内の人的交流も狭まった。また、女性の職場進出の増加、子供の学習塾通いなどにより、家庭内個別行動化が進んだ。

しかし、職場を基本とした個人の生活スタイルは、近年変化の兆しが見える。労働時間短縮の動きと共に自由時間が増大し、共働きの増加に伴って、夫も家事や育児に目を向ける必要性が高まり、また高齢化の進展により定年後の余暇時間の過ごし方に対する関心が高まってきた。このような状況から、人々は企業中心な生活からライフスタイルを考慮する生活体系へと変化してきた。今後は、仕事中心の交流だけでなく家庭や地域社会をはじめとする様々な場面での交流が見直されて行くであろうと予測している⁽⁹⁾。

このように都市化の進展と交流の変遷を辿ると、現代社会は以下に列挙する、4点の背景を持ち合わせていることに気がつく。

- 1) 核家族化, 少子化, 共働きの増加などによって, 家族による福祉力・教育力等の扶助機能が縮小し弱体化傾向にあること。
- 2) 都市化の影響や生活様式の変化等によって, 地域における相互扶助機能や連帯意識が希薄化していること。
- 3) 2005年には約5人に1人, 2015年には約4人に1人, 2050年には約3人に1人が65歳以上の老人という超高齢社会の到来が確実に予測されること。
- 4) 物質的な生活水準に対する満足度の向上に伴って, 人々は物の豊かさより心の豊かさを重視する傾向が強まり, それを何かしらの行動に結び付けようとしていること。

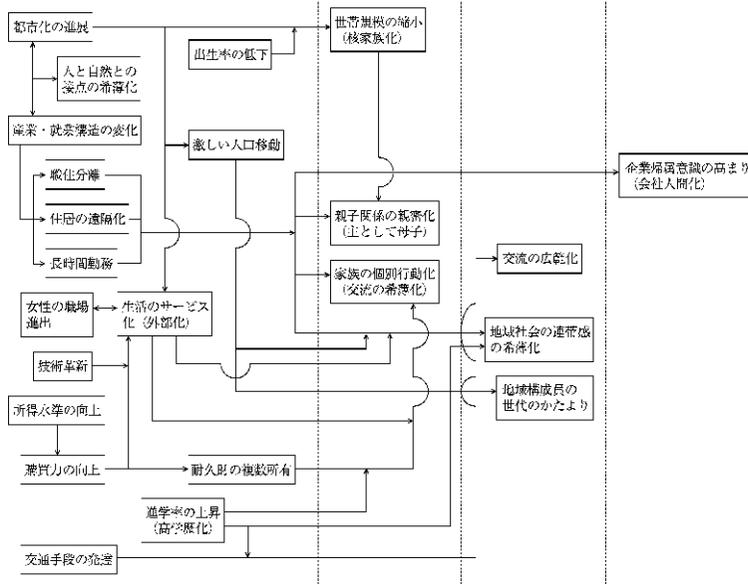
以上の社会的背景は, われわれの精神状態に要求(欲求)要因を作り出し, 特に達成欲求や社会集団への貢献欲求に働きかけ, 個人の生活と社会全体との関連性を強く意識させていると考えることができる。この意識は, 「個人生活の充実をもっと重視すべきだ」という個人志向の意見よりも「国や社会のことにもっと目を向けるべきだ」「社会のために役立ちたい」という社会志向の意見が多かった総理府「社会意識に関する世論調査」の結果にも反映している。このように, 上述した4点の背景に付け加えて, 国際化の進展や環境問題の深刻化等の社会問題によって, 人々の関心が広く社会に向けられるようになった。この社会参加意識や貢献意識の高まりは, 社会全体における他者との関わりを通じて, いかに精神的満足感を獲得して行くかという点が重視された結果であると思われる。これは社会のために自己を犠牲にするということではなく, 個人の生活を充実させるために社会に関わっていくことが, 社会の豊かさ, ひいては個人の豊かさに繋がってくるという認識に基づくものであると気づき始めたからである(図表3参照⁽¹⁰⁾)。

これらの社会的背景が内発的動機付けの誘因となり, その要求(欲求)を満たすために引き起こされた精神がボランティア精神であり, またその行動がボランティア活動となって現れていると考えられる。そして, その活動を通して自己実現を図ろうとしていると思われる。つまりこの現象は, 内部環境から自発的に発せられる, 社会集団への貢献欲求を駆り立てる本能的な欲求であるということが出来る。欲求とは, 精神や身体に不足しているものに必要性を感じ, その不足を満たそうとする精神の働きであるから, われわれは, 地域社会に対する欲求をボランティア活動によって満たそうとしているのである。

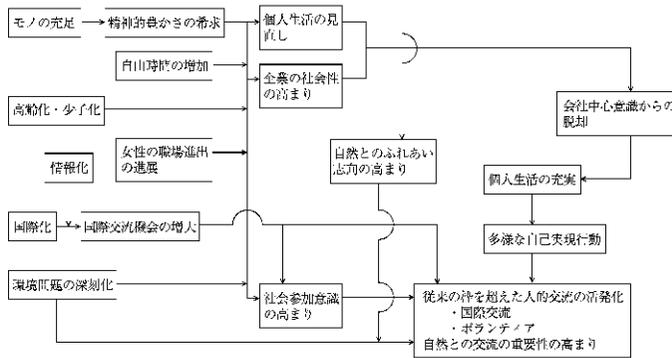
したがって, ボランティア活動は内発的な力を発揮する自由な意思に基づく主体的な活動であることから, 内発的動機付けによってもたらされた精神状態を具現化したものであるということが出来る。

図表3 社会経済環境の変化と交流への影響

(1) これまでの動き
(社会経済環境の変化) (家庭) (地域) (職場)



(2) 新しい動き



(備考) 個々の流れは重要と思われるものを単純化して取り上げており、これ以外にも様々な相互作用が考えられる。

出所：経済企画庁編、『国民生活白書』，大蔵省印刷局，1993，14ページ。

3-2 欲求と適応

3-2-1 欲求不満 (frustration)

欲求とは、精神や身体に不足しているものを必要と感じ、その不足を満たそうとする精神の働きである。動物の欲求は大部分、その生命を維持しようとする欲求であるが、人間は精神的に高度な理想を持ち、生活も複雑であるため欲求の種類も多くなる。外部環境が誘因となり欲求が生じると、その欲求を満たそうとして行動が起こる。これが満たされると精神の緊張は解消され、平静な状態に戻る。しかし、われわれの日常生活において、欲求はすべて即座に解消

されるとは限らない。むしろ、様々な条件により欲求が阻止され、満たされない場合が多い。この欲求の満足が阻止されるという状況に主眼を置くときには、欲求阻止、欲求が阻止される時の個人内の緊張、あるいは動因状態に主眼を置くときには、欲求不満と解釈されることが多い。⁽¹¹⁾

欲求不満は、精神分析的な神経症論を考える上で重要な概念となっている。フロイト (Freud, S.) 以後、主に学習理論に基づいた実験的検証による研究が数多く行われており、その分野についても、様々な立場からの仮説が立てられている。一口に欲求不満といっても、そこにはいくつかの過程が含まれており、それらのどの側面に注目するかによって、その過程を3つに分けて定義付けすることができる。⁽¹²⁾

1) 欲求不満状況 (frustrating situation)

ある生活体にとって、重要かつそこに到達しようと期待している目標があり、この目標へ到達しようとする行動が、何らかの妨害を受けているという段階過程

2) 欲求不満状態 (frustration state)

1)の結果、生活体が生理的もしくは心理的に何らかの情緒的緊張に陥っている段階過程であり、こうした状態は、漠然とした怒りや不安、生理的な面では自律神経活動の不調等として現れてくる。

3) 欲求不満反応 (reaction of frustration)

2)があまり表だった行動として現れてこないような、生活体内部の緊張状態に注目しているとすると、欲求不満反応は、その情緒的な緊張を解消するために様々な反応が現れる段階の過程を意味しており、逃避行動、攻撃行動、自己防衛行動などがある。

欲求不満の発生する条件としては、欲求を満足させる目標や手段が環境内に存在しない場合、社会集団の慣習や規範による制限が欲求の充足を阻止している場合、2つ以上の欲求が存在し、それらが相互に対立している場合 (葛藤・conflict) などが考えられる。

また、欲求不満に耐えて、適応的行動を維持しうる能力をフラストレーション耐性 (frustration tolerance) という。欲求不満が生活体内部に存在すると、精神が不安定になり、感情の乱れが生ずる。このようなとき、その状態に押し流されず欲求を満たす必要性がある。欲求不満に耐える性質 (耐忍性) が強ければ、精神的障害を引き起こす可能性は少ないが、耐忍性が弱い場合や欲求不満の程度が強い場合、またそれが長期間にわたり継続する場合は、現実不安や神経症的不安または葛藤が生じてくる。⁽¹³⁾

3-2-2 適応機制

しかし、人間にはこのような場合に、欲求不満を解消し、より安定した状態に自己を保持しようとする自然の働きが備わっている。この働きを適応機制という。人体が外部環境に適応して生活しているのと同様に、精神機能にも環境に適応しようとする傾向があるのである。この適応機制には、積極的・合理的な工夫で欲求の充足を図る合理的機制、消極的に事態から逃避

して欲求不満を解消しようとする防衛機制の2種類に分けることができる。特に、防衛機制は1) 逃避機制・2) 攻撃機制・3) 自己防衛機制に分類できる。逃避機制は、消極的に現実の事態から逃避して欲求不満を解消しようとする機制である。これには、抑圧・拒否・反動形成・白昼夢・退行・孤立などがある。以下にそれぞれの説明を加えることにする。

1) 逃避機制

- ①抑 圧：現実にはかなえられない欲求を押しえつける機制。
- ②拒 否：欲求充足が妨げられた場合に、他との接触を絶ち、課せられた要求や権威に反抗するもの。
- ③反動形成：抑圧されたものと反対の傾向を強調すること。
- ④白 昼 夢：現実の世界では充足できない欲求を、夢や空想の世界で満たそうとすること。
- ⑤退 行：現実には満たされる可能性の少ない欲求不満がある場合、以前の未熟な発達段階における欲求充足方法を用いて、欲求を充足しようとするもの。
- ⑥孤 立：自己の欲求が満たされない場面から身を引くことにより、自己の安定を図ろうとするもの。

2) 攻撃機制は、欲求不満の解消を阻止する人・物・法律や規制などに攻撃を加えて、自己の安定を図る方法である。

3) 自己防衛機制には、同一化・合理化・代償などがある。(以下にそれぞれの説明を加える)

- ①同 一 化：あこがれや尊敬を抱いている人の、外見的な服装や態度を真似ることによって、自己欲求を満足させること。
- ②合 理 化：へりくつや負け惜しみをいって合理化を図ること。特に、自分にとって不都合なことをすべて他人の責任に転嫁することを「投射」という。
- ③代 償：本来とは別の手段で欲求を満足させること。特に、劣等感などを解決する方法として、肢体不自由者が、努力を重ね、高度な技術を身につけるなどは「補償」と呼ばれ、本能的欲求を、より価値の高い芸術・学問・スポーツなどに転換する方法は「昇華」と呼ばれている。この昇華は防衛機制の中で、最も健康的な機制であるといわれている。

この中で注目したい適応機制が昇華である。昇華は、欲動が本来の目標を放棄し、より社会的な価値や道徳に適合する目標に向け換えられることであり、フロイト (Freud, S.) によって導入された概念である。欲求を満たすためエス (人格の欲動的、本能的なものの源泉・身体組成から発生する本能的欲求の無意識的表現) を起源とするエネルギーは対象に向かうが、昇華は、この対象リビドー (性的エネルギー) として対象に向かう過程の中で生じる精神機制であるとしている。すなわち、本来の対象・目標に向かうことが、文化的・社会的な理由によって阻止されると、このエネルギーは、他に振り向けられることになるが、その際、性的・攻撃的満足以外の目的で、社会的に承認される価値あるものに変換される場合のことである。こうした意味で、昇華は、成功的防衛もしくは適応的防衛と呼ばれている。また昇華は、欲求の直

接的・即時的満足代わりに、対象を間接的なものに置き換え、社会に適応した形での欲求充実がなされ、欲動は解放され、精神内界の葛藤が適切に処理されているため、そこでもたえられる快感は、感覚的な満足としての快感のみならず、葛藤を解決した結果としての快感を含んでいる。

この昇華された創造的活動の特徴をブロス (Blos, P.) は、以下のようにまとめている。

- 1) 高度に自己中心的、すなわち自己愛的である。
- 2) 芸術的媒介という限界に従属しており、その結果、部分的には現実思考的である。
- 3) 「新しい存在に生命を与える」様式、すなわち自己内部で働く。
- 4) 環境との伝達を構成し、それゆえに部分的に対象関係的である。⁽¹⁴⁾

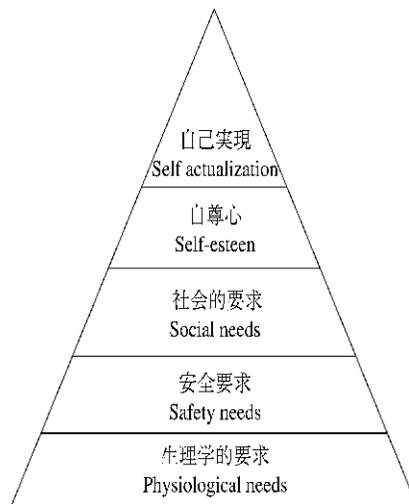
フロイト (Freud, S.) は、主に芸術活動と知的研究を昇華の例として説明している。彼は、人間の文化建設に昇華された性欲動が多くのエネルギーを供給していると考察した。満たされない欲求があるがゆえに、人間は文化活動の中に無意識に充足をもたらすような代理活動を求め、これが文化発達の源泉となるものであると述べている。しかし、現代社会においてこれほどまでにボランティア活動が注目され、市民社会に対しての貢献欲求が強まっているのは、ボランティア活動を転換行動と捉えるならば、ただ単に、性欲動転換行動のためだけではなく、現代社会によってもたらされた価値体系の喪失・情緒的飢餓感・無意味感や不安感などのひずみ、つまり、人間疎外状況 (人間らしさが失われたことに対する攻撃欲動) を昇華する行動と考えることができるのではないだろうか。ボランティア活動という社会的適応行動を通して、自己内部に存在する欲動を昇華させ、自己を実現することに喜びを感じ、生きがいを持って明るく豊かな人生を歩むことを見出しているように思われる。言い換えれば、人々が、地域社会に意識を持ち始め、社会貢献欲求が芽生えたのは、社会に対する欲求を解消するための適応行動であると考えることができ、それが適応行動としてのボランティア活動という形で現れてきたと考えられる。これは、適応機制の昇華によって欲求不満を解決しようとする行動であるといえる。

フロイト (Freud, S.) の精神分析理論と行動主義は心理学の二大勢力といわれている。しかし、次項で取り上げるマズロー (Maslow, A. H.) は、この二つの理論では人間の行動の病理的側面や動物的・環境的側面の究明には寄与したが、人間の心理学的に健康で成長へと向かう側面は注目されていないと指摘した。そこで両者を統合した、全体的な人間理解が必要であるとし、健康で成熟した人々を対象として、精神的健康について調査を始めた。それが「自己実現 (self-actualization)」の研究である。

3-3 マズロー (Maslow, A. H.) の階層構造説

マズロー (Maslow, A. H.) は、欲求 (または要求・動機・動因、以下欲求とする) の階層構造説を提唱し、低い次元の欲求が満たされたとき、高次の欲求が現れるとした。彼は人間の欲求を、1) 生理的欲求 (食物や水のように身体機能に不可欠なもの)、2) 安全の欲求 (生命

図表4 マズロー (Maslow, A. H.) の要求階層構造



出所：田中平八編，『現代心理学用語辞典』，恒内出版，1990，301ページ。

の危機から守られる)，3) 社会的欲求 (所属一集団の同一性・成員性・愛情一他者との積極的な相互作用など)，4) 自尊的欲求 (達成と社会的承認)，5) 自己実現的欲求 (潜在的可能性の実現，「至上の経験」) の5種類に分け，これらが順に階層を成しているとした (図表4参照)。

最も下位にある欲求は，飢えや渴きを癒したいという生理的欲求であるが，この欲求が満たされると，危険を回避し安全に生活を送りたいという安全の欲求が生まれる。このように，低次元の欲求が満たされて初めて，高次の欲求が生まれるという点が，“階層”と呼ばれる理由である。こうした階層の中で最も高次に位置するのが，自己実現 (self-actualization) の欲求である。安全の欲求だけでなく，社会的欲求も満たされ，自分への自信が持てるようになって，まだ満たされない欲求がある。それは，自分が持つ能力を発揮したいと思う気持ちや自分らしく精一杯生きたいという気持ちである。この気持ちをマズロー (Maslow, A. H.) は，自己実現の欲求と呼んでいる。自己実現へと向かう成長動機が作動し，自己実現を手に入れた人は，「至上の幸福と達成の瞬間」が見られるとし，これを頂上体験 (peak experience) と名づけた。

またマズロー (Maslow, A. H.) は，自己の可能性を十分に実現している人を自己実現的人間と名づけ，精神的に健康な人間の極に位置付けている。そして，このような人間に共通した特徴を以下のように挙げている。

- 1) 主観を交えず事実をありのままに見る正確な現実認知能力
- 2) あるがままにすべてを受け入れる自己・他者・自然の受容性
- 3) 自己の内面から湧き上がるものを表出する自発性
- 4) 自己の問題にとらわれず，課題に没頭する集中力を持つ問題中心性
- 5) 世俗的なことにとらわれず，プライバシーを好む超越性

- 6) 周囲からの評価に左右されない自立性
- 7) 日常的に繰り返される生活の中にも、喜びや驚きを持って様々なものを発見する鑑賞力の新鮮さ
- 8) 自己を越え、現実を越えた神秘的経験に対する感受性
- 9) 人類全体に対して、一体感を持つ共同社会感情
- 10) 少数の友人や愛する人との間に開かれた心の親密な関係
- 11) 偏見や差別意識にとらわれない民主的性格構造
- 12) 確固たる倫理感覚による手段と目的の区別
- 13) 哲学的で悪意のないユーモアセンス
- 14) 既成のものにとらわれない自由な発想と創造性
- 15) 受動的に分化に組み込まれることに対する抵抗⁽¹⁵⁾

以上を踏まえると、人がボランティア活動に駆り立てられるのは、人間が本来持っている欲求を実現しようとしているからであり、自然な行動であるということが出来る。現在は、ボランティア活動を特別なものとして捉えすぎるがゆえに、概念規定が困難になっているのではないだろうか。改めて人々は、ボランティア活動を手段として自分自身を見つめなおし、価値ある人生を営みたいと願い始めている。ボランティア活動に参加する意味は「困っている人のため」だけでなく自分の潜在能力を掘り起こし、他者との関係、社会との関係の中で自分の価値を見出すこと、すなわち自己の人間としてその可能性に気づき、認識する喜びを得ることが出来るからである。

ボランティア活動の概念を踏まえ、フロイト (Freud, S.) の精神分析理論とマズロー (Maslow, A. H.) の階層構造理論を比較すると、人間の行動の源泉は本能的欲求を満たすためであるという点に関しては共通性を見出すことが出来るが、フロイト (Freud, S.) の理論に沿えば、外部的環境によってもたらされた誘因により欲求不満が発生し、性的欲動を含めた攻撃欲動が発現するため、それを満足させるために適応機制によって、社会的に価値のあるボランティア活動に昇華させ、欲求の充足を図るというものである。一方、マズロー (Maslow, A. H.) の理論では、自己実現の欲求は本能的欲求として人間が兼ね備えているものであり、達成欲求を満たし、社会貢献欲求を充足させるために、それらの自己実現の構成要素に対する欲求を解決するための手段として、ボランティア活動を引き起こすという過程を辿っている。

「ボランティアする心」

もてるものが もたないものにはない
しあわせなものが ふしあわせなものにはない
もてるものも もたないものも
しあわせなものも ふしあわせなものも

ともに考え ともに学び ともに生活しあうことなのだ

いそいではいけない かまえてはいけない
たえることだ まつことだ いのることだ

(高島 巖『愛のおのずから起きるとき』誠心書房, 1973年)

この言葉は、ボランティアの理念についての問いかけを行う場合に、多く引用される言葉である。この意味を考えてみると、改めてボランティア活動と呼ぼうと呼ぶまいと、活動の余地は身近なところにくらでもある。お年寄りに席を譲る、母親が忙しいときに、いわれなくても子供が手伝う、道に落ちている空き缶を拾う、隣の一人暮らしの老人に手を貸す……やり方は無数にある。組織活動としてやるわけではなく、「ボランティア活動」とわざわざ呼ばないだけで、質の上では今世間でいわれているボランティア活動と少しも変わるところがない。すなわち、「隣の人に手助けする心」を持たない者は、国内であろうと、海外であろうと、真の意味でのボランティアではありえないといえる。この心は、「仁愛」といっても良いのではないだろうか。

人間には、どんなに社会が変化しようとも、「時代を超えて変わらない価値のあるもの」がある。それは、豊かな人間性、正義感や公正さを重んじる心、自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心、人権を尊重する心、自然を愛する心など、すなわち不易である。しかしながら、われわれは社会の変化に無関心であってはならず、「時代の変化と共に変えていく必要があるもの」、つまり流行に柔軟に対応していくことも必要である。このように、われわれは「不易」と「流行」を十分に見極めながら、人生を営んで行くことが肝要であると思われる。

エーリッヒ・フロムは、1997年に刊行した著書『生きるということ』の中で、人間の生活様式を「持つ」(To have) ための生活様式と、「在る」(To be) ための生活様式に分類している。「持つ」ための生活様式とは、社会的地位や名誉、お金や財産、知識、学歴、肩書き、権力などの所有に専念する生き方であるとし、「在る」ための生活様式とは、自己に存在する、ある限りの能力を生かして「生きることの喜び」を再認識する、つまり、「こころの豊かさ」に覚醒するものであり、「持つ」ための生き方とは相違するものであるとしている。このように考えるとボランティア活動は、人間が人間として存在する、「自己存在の意味」を究め、人間が地域社会から市民社会、ひいては地球社会に共生しうる、社会的存在意義を認識し、「在る」ために価値のある社会を創造する行為であるといえる⁽¹⁶⁾ことができる。

最後に、1997年11月20日、第52回国際連合総会において、日本の提案に基づき、123ヶ国の賛同(共同提案国)を得て、2001年を「ボランティア国際年(IYV)」(International Year of Volunteer)とすることが満場一致で採択された。日本は提唱国として、国際社会からリーダーシップが期待されている。また、ボランティア活動をより一層促進するために、民間(市民

社会)と行政が協力し、取り組みを進めて行く必要がある。近年、ボランティア活動の重要性が広く認識されるようになり、市民社会の実現に向けて、重要な転換期を迎えているといわれている。21世紀最初の年に「ボランティア国際年」を迎えることは、われわれにとってひとつのチャンスかもしれない。これを契機に、人々の心にボランティア精神が芽生え、明るく豊かで平和な社会を創って行くことができればという思いである。

(注)

- (1) 小稲義男編、『新英和大辞典』，研究社，1980，2370ページ。
- (2) 徳久球雄編、『人の生き方としてのボランティア』，嵯峨野書院，1997，3—4ページ。
- (3) 社会福祉法人大阪ボランティア協会編、『ボランティアにおける14章』，大阪ボランティア協会，1995，77—78ページ。
- (4) 経済企画庁編、『国民生活白書』，大蔵省印刷局，1994，118—121ページ。
- (5) ピーターストラットン，ニッキーヘイズ，『人間理解のための心理学辞典』，ブレーン出版，1996，88ページ。
- (6) 前掲書，88—89ページ。
- (7) 前掲書，89—90ページ。
- (8) 前掲書，90—91ページ。
- (9) 経済企画庁編、『国民生活白書』，大蔵省印刷局，1994，8—11ページ。
- (10) 前掲書，12ページ。
- (11) ピーターストラットン，ニッキーヘイズ，『人間理解のための心理学辞典』，ブレーン出版，1996，99ページ。
- (12) 氏原寛他，『心理臨床大事典』，培風館，1992，973ページ。
- (13) ピーターストラットン，ニッキーヘイズ，『人間理解のための心理学辞典』，ブレーン出版，1996，99ページ。
- (14) 氏原寛他，『心理臨床大事典』，培風館，1992，996ページ。
- (15) ピーターストラットン，ニッキーヘイズ，『人間理解のための心理学辞典』，ブレーン出版，1996，131ページ。
- (16) 『ボランティア白書 1999』編集委員会，『ボランティア白書 1999』，社団法人日本青年奉仕協会，1999，19ページ。

文 献

- 1) 氏原寛他，『心理臨床大事典』，培風館，1992年。
- 2) 榎田勝利，『ボランティアの鍵貸します—私たちを変えたアメリカでの体験—』，1997年。
- 3) 経済企画庁編，『国民生活白書』，大蔵省印刷局，1994年。
- 4) 小稲義男編，『新英和大辞典』，研究社，1980年。
- 5) 社会福祉法人大阪ボランティア協会編，『ボランティアにおける14章』，大阪ボランティア協会，1995年。
- 6) 生涯学習審議会，『学習の成果を幅広く生かす—生涯学習の成果を生かすための方策について—(中間まとめ案)』，1999年4月。

- 7) 総務庁青少年対策本部編, 『青少年白書—青少年問題の現状と対策—』, 1996年。
- 8) 立木茂雄, 『ボランティアと市民社会』, 晃洋書房, 1997年。
- 9) 徳久球雄編, 『人の生き方としてのボランティア』, 嵯峨野書院, 1997年。
- 10) 中嶋充洋, 『ボランティア論』, 中央法規出版, 1999年。
- 11) 日本社会教育学会編, 『ボランティア・ネットワーク—生涯学習と市民社会—』, 東洋館出版社, 1998年。
- 12) ピーターストラットン, ニッキーヘイズ, 『人間理解のための心理学辞典』, ブレーン出版, 1996年。
- 13) 『ボランティア白書 1999』編集委員会, 『ボランティア白書 1999』, 社団法人日本青年奉仕協会, 1999年。
- 14) 宮城孝, 『イギリスの社会福祉とボランティア—セクター—』, 中央法規出版, 2000年。
- 15) 巡静一, 『ボランティアの今日的課題』, 大阪ボランティア協会, 1998年。
- 16) 巡静一, 『日々の暮らしとボランティア活動』, 大阪ボランティア協会, 2000年。
- 17) 巡静一, 早瀬昇, 『ボランティアの理論と実際』, 大阪ボランティア協会, 1997年。
- 18) 吉村恭三, 『ボランティアの世界』, 築地書館, 1999年。